



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	翻刻『万代大雑書古今大成』（十五）
Author(s)	伊藤, 孝行; Ito, Takayuki
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 78, 1(右)-11
Issue Date	2025-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94454
Type	departmental bulletin paper
File Information	78_06_Ito.pdf



《翻 訳》

翻刻『万代大雑書古今大成』（十五）

伊 藤 孝 行

《要 旨》

本稿では、『万代大雑書古今大成』（読み…ばんだいおおざっしょここんたいせい）の翻刻の一部を掲げる。『万代大雑書古今大成』は天保年間に発行され、明治に入り改訂版が刊行された。内容は、生活するうえで必要なことが記してある便覧である。それゆえ、古くから伝わる習慣から占星術、名付けの際の留意点等々、多岐にわたる内容となっている。

『万代大雑書古今大成』は、管見のかぎり今のところ翻刻されていない。近代日本語資料の一として、また近代に於ける日本の習慣や風俗についての資料として、一定の価値はあろう。本稿では伊藤（2024）に続き、「き一」より「ゆ六」まで掲げる。

SUMMARY

Reprinting: “Bandai Ozassyo Kokon Taisei” (15)

This paper presents a part of the book entitled “Bandai Ozassyo Kokon Taisei”, which was first issued in the Tenpo Period (1837-1858), rewritten in present-day Japanese [characters]. It is a guide book describing the particulars of daily life at the time. It ranges widely over many themes, from traditional customs and astrology, to the points to note in naming children. Although “Bandai Ozassyo Kokon Taisei” is a printed book, and has had a revised edition issued in the Meiji period, it has not been translated into modern characters before, to the author’s knowledge. As one of the sources of modern Japanese and also as a material describing Japanese manners and customs of the past, it is of indisputable value. An abstract from the book, together with the title, colophon and preface, are reproduced here. This paper reprints the Chapters Ki-1 - to Yu-6 in Ito (2024).

／ 2 ヲ

凡例

- ・ 漢字の表記は、通行の字体に改めた。
- ・ 割注は へ へ で示した。割注中の改行箇所は 〳 で示した。
- ・ ● は翻刻しかねた箇所である。今後の課題としたい。

き一 霧の説

霧ハ水土の湿気也風有て
吹散ときハ霧とならずかせ
ふかずして吹ちらさぬ時ハ霧

しきミちて重霧となる

爾雅曰地氣散じて天応

せざれば霧となると見え

たり

き二 祈祷せざる日

正【四日／七日】二【五日／八日】三【六日】十【あ】十一【と

ら】十二【むま】

き三 灸針忌日

○長病日 此日灸をいむべし

六日 十五日 十八日 二十四日 二十九日

○灸いミ日

男ハ曆中段 のぞくの日をいむ又いぬの日をいむ

女ハ同 やぶるの日をいむ又ミの日をいむ

○毎月灸いミ日

正【うし】二【いぬ】三【ひつじ】四【たつ】五【うし】

六【いぬ】七【ひつじ】八【たつ】九【うし】十【いぬ】

十一【むま】十二【ね】

き四 灸前後いむべき事

疱瘡の後半年が間 産後七十五日 大病後百日が間

水腫 陰腫 枯燥 疥癬 瘡毒 金瘡

の類ミな灸をいむなり勿論前三日後七日房事を忌

き五 簀簾乙并霽（註…読み「きんじいつならびにじ」。

時疫を初め其外はやり病の

さかんなる時此符を畫て門戸に

張置バ惡鬼神をさくると也

○霽の字を熱て門戸に張もよし

き六 灸後忌べき事

鯰 熱麴 冷物 生物 酒 房事

其外大にいきり大つかれ大に飢大食大酒

勿論灸すえ居るうち寝る事無用

右の外灸忌日俗説さまざま有といへども信用し

がたし今禁忌をあぐるはいづれも医書に見

えたる正しき事ばかりをあぐればうたがふべからず

き七 鬼門の口決

鬼門相剋の事ハ震の卦

より七卦次第に茶臼まハ

りに相生し又旺ずれど

も艮の八卦ハ前後へ剋す

これをきもとす

艮の卦を一ツ欠くとき
ハミな相生すこれすな
はち鬼門をかく来由な
り尤口伝あり

き八 九天の説

日月星の周旋所の天に
九ツのだんあり是を九天
といふ上に図する所の黒き
丸を地とし其外にしるす
輪九ツを九天といふ高低ハ
次にしるすがごとし

九天日月星の行道位置大小高低略説

右の図地の外の輪を月輪天といふ月のめぐる道也其外を
水星天と云其外を金星天といふ此水星金星の両星ハ則
日輪を真中にして其外をめぐる故に外の土木火の三星より
早し如図日輪の外二ツの輪是也水星の外の輪を日輪
天と云其外の輪を火星天といふ其外の輪を木星天といふ
其外の輪を土星天と云其外の輪を恒星天といふ則二十八宿
の天也其外の輪を宗動天といふ右九天なり又九天の外を
常靜天と云宗動天の衆星其数無量にしてはかるべから
ず常靜天の高き事も亦はかるべからず

○日輪ハ一日に一度をす、ミて三百六十五日二十五刻にして一周

天をなす也

○月輪ハ二十七日七時四十二分余にして一周天をなす一年に天を
十二度

めぐるなり

○水星と金星とハ日輪を心にしてめぐる故図のごとく日輪の
外に二ツ輪あり是其めぐる道也故に土木火の三星より旋る
事大に早し

○火星ハ日輪の又其外の天をめぐる故至て遠し一年三百二十一日
九十三刻にして一周天をなす稍二年近くかゝるなり

○木星ハ十一年三百十三日七十刻にて一周天をなす稍十二年近
かゝる也

○土星ハ二十七年一百五十五日二十五刻にして一周天をなす稍二
十七年半程かゝる

○日輪【大サ三十二万九千五百〇一里〇六／高サ二千〇〇六万九
千六百一十二里半】○月輪【大サ九百三十八里八四〇五／高サ
六十万〇三千一百五十二里半】

○土星【大サ二万九千二百九十六里四〇四四／高サ二万五千七百
二十万三千二百〇五里】○木星【大サ三万五千三百〇一里九三
七／高サ一万五千八百四十六万一千九百八十里】

○火星【大サ一千九百十八里二三七／高サ三千四百二十六万一千
百二十五里】○金星【大サ三千四百一十二里六六／高サ三百万
〇〇八百五十一里四分一】

○水星【大サ一千八百三十〇一里二一〇六／高サ一百一十四万八千四百三十七里半】○大地【大サ三千四百三十七里七四五】

右各大日本里法一里三十六町のつもりなり

かくの如く広大なるものなれども我地より遠望すれば
まことに螢火のごとし見分の大小ハ其遠近によればなり

き九 灸する時向ふ方

正六月【北むきよし／東むきわろし】
二十月【西むきよし／北むきわろし】
三月【東むきよし／南むきわろし】
四月【東むきよし／たつミわろし】
五月【たつミよし／北むきわろし】
七九月【南むきよし／西むきわろし】
八月【さるのかたよし／西むきわろし】
十一月【いぬのかたよし／北むきわろし】
十二月【ゐのかたよし／南むきわろし】

ゆ一 弦月の図説

ゆミはり月ハ七日八日をいふ也

これを上弦といふ二十二日二十三日を

下弦といふ也月がしらハ左り

下りに見え月の末にハ右の方

図如此下りて見ゆるなり

ゆ二 夢はんじ画抄同辯

夢の説いろ／＼ありといへども古へ周礼に占夢の官を置れたり既に漢の丁公ハ松をミて三公の位にす、ミ唐の李白ハ筆頭に花咲と見て古今独歩の文人となりしも皆夢のしるしにたがはす○唐の段成式が酉陽雜俎に悪夢をさげんとならバ主夜神の呪を書て寢所の上に張置てあしき夢を除くべしといへり則主夜神の呪ハ

婆珊婆演帝 如此書てはり置べし

古人のとける夢の占ひを左にしろすこれ借身の一術なりと知べし

ゆめはんじ百三十二ヶ条

- 天にのぼるとミれば大にたつとき身となるべし
- そらはるゝと見れハ大によし
- そらあかくなると見れバよし
- 夜あくるとミレバやまひほんぶくすべし
- 月日おつると見れハちゝはゝをうしなふ
- 月日をのむとミレバたつとき子をまうく
- かミなりにうたるゝとミレハ大によし
- くも四方におこるとミレハあきなひごとよし
- ゆきふると見れハよろこびあり
- かミなりをきくとミレバリつしんする也
- しものふるを見れバあしゝ
- あめにあふとミレバ酒しよくにあふべし

- 地うごくと見れハ出世す
- 大石をミればたからを得べし
- 大石をにハにすゆるとミればよし
- いは同にのぼると見れバ大によし
- つちの中にいるとミレバ大によし
- みぞをほらせるとミレバ大によし
- 山くづるゝとミレバ大にあしゝ
- ほらのうちに入と見れバ大によし
- 木をうゆるとミレバ大によし
- ざしきに木はゆると見れバわろし
- うミをわたると見れバよし
- 米をかむとミレバ大によし
- くろ雲まひさがると見れバやまひあり
- 大木をになふとミレバ大によし
- 門内に木はゆるとミレバ大二よし
- くハの木を見れバ児やまひいづる
- なしをくらへバリべつすべし
- かミゆふと見れバ大によし
- かきをくらへバばやまひあるべし
- ぐミはゆると見れバ大によし
- 神をはいすれバ大によし
- 仙人にあへバ大によし

- 貴人のまへにいづれバ大によし
- しらがとなると見れバ大によし
- かたなを人にやるとミレバ大にあしゝ
- はたを見れバ大によし
- そバにかたなわきざしあれバ大によし
- たかきちんに入とミレバ大によし
- しんたくにうつると見れバ大によし
- 身よりひかりいづれバ大によし
- 齒おつるとミレバうれひあり
- かんむりきるとミレバ大によし
- あたらしき小袖をきると見れバ大によし
- ミのかさをきレバ大によし
- 女かたなをさせバ大によし
- かたなをとぐと見れバ大によし
- づつうするとミレバ出世す
- かほにくさできるとミレバ大によし
- かミぬけるとミレバ子にたゝる
- あせいづると見れバ大にあしゝ
- かミあらふとミレバ大によし
- 井戸がへすると見れバ大によし
- かせふくとミレバやまひあり
- ミづをくむと見れバ大によし

- 井をのぞきて水をミレバ大によし
- さかづきをミレバよき子をまうく
- 米だハらを得るとミレバ大によし
- きんぐをはくと見レバ大によし
- いとおむくと見レバ大によし
- かゞミくもレバ大にわろし
- かゞミわるレバ大にあし、
- かゞミをもらへバよき子を得る
- 門の戸わるレバ下人はしる
- かゞミを見レバ大によし
- すゝはきをすレバ大によし
- ありたゝミをはへバわろし
- もうせんを見レバ大によし
- ふねにのるとミレバ大によし
- ほかけ舟を見るもよし
- のりものにのると見レバ大によし
- ひろき道を見レバ大によし
- 橋をわたるとミレバ大によし
- はしに産すると見るもよし
- 橋ばしらおるゝとミレバさいをうしなふ
- 酒えんすると見レバ大によし
- 乳をのむと見レバ大によし

- あめをくふとミレバあし、
- 一切のくだものをくふとミレバあし、
- もふくをきるとミレバ出世す
- なくと見レバ大によし
- そうれいをミレバあし、
- びわをひくとミレバ他人よりさいハひきたる
- そうれいを出すとミレバよし
- 書をよむとミレバ大によし
- 人に書をおしゆると見るもよし
- ゆミのつるきるゝとミレバ兄弟わかる
- 弓矢をもつとミレバ大によし
- ほとけとはなしすると見レバ大によし
- 草花をとると見レバ大によし
- あさ日いづるとをバ大によし
- ほしいづると見レバ大によし
- たまを得るとミレバに子をまうく
- 野山にいると見レバ大によし
- 松をとるとミレバ大によし
- 米そらよりふるとミレバよし
- びやうぶたゝむと見レバ命長し
- つゞミうつとミレバあし、
- 人うちよりいづると見レバよし

- 人あつまればやまひあり
- たに水をのむとミレバふつきするなり
- にしきをたつと見れバ大によし
- 山くづるゝと見れバおどろきあり
- いとをくると見れバむつかしき事あり
- つえつくとミレバやまひあり
- とりゐをミレバふつきとなる
- かみなりうちへいると見れバたからを得べし
- 二王を見れバいのちながく大によし
- 海をおよげバ大によし
- 雨ふると見れバよろづこゝろにかなふ
- やねのうへにおるとミレバ万よし
- ぜにをまうけると見れバ大によし
- あふぎを得ると見れバよろづよし
- ろうに入とミレバ大によし
- 人にうたるゝと見れバよし
- あみをうてバ大によし
- たねまくと見れバくわほうあり
- 海のミづきよくすめバ大によし
- やまをのぼると見れバくわほうあり
- きじをミレバたからを得べし
- 亀を見れバふうきとなる

- うをつるとミレバ大によし
- かうもりを見れバ大によし
- むまにのるとミレバ大によし
- くまを見れバよき子をまうく
- ねこねづミをとれバ大によし
- ゆあミすると見れバ結びあり
- 水ながるゝを見れバ縁談と、なふ
- うをのとぶを見れバ吉事あつまる
- むかでにさゝるゝとミレバよし
- とんぼうあつまるとミレバよし

ゆ三 雪の説

雪ハもと雨なり寒気はな
ハだしきときハ空中に風
むすびてゆきとなるなり
寒気はなハだしき時はミな
ゆきなるべきに雨ふるハこれ
寒気のうち火氣をふくミ
て雪となる也ゆへに雪のふる
日ハかならずあたゝかなり
あたゝかならざれば氣のほ
ることならざるなり
朱子曰雪ハたゞこれあめを

むすびてなる也雨ハ寒に逢
てこるゆへ高くさむき処ハ
はやくゆきふるなり

本草綱目にいはく雪の味
あまく冷也冬至の後第三
の戌を臘とす臘のまへの
三雪大に菜春麦によし
又よく虫蝗をころすまた
蠟雪を陰所に密封すれバ
数十年損せず此雪水を

もつて五こくのたねをひたせバ
早にたへむしを生ぜず几席
の間にそゝげバ蠅おのづから
さる一切の食物そのほか
菓実のるいにおほひおさ
むるにむしつかず

五雑俎にいハく閩中にハ雪
なししかれども折にハ十年
に一度もふることあり村
里の幼児ほんそうして
くるひよろこぶおもへらく
初て見るがごとしと南人

北方の八月に雪ふることを
信とせず北人も又南方に
五月稲を刈事を信ぜず
と云へり

按ずるに冬ハ日輪天の南
極をゆくゆへ北国いよく
寒し本朝しなの越後出羽
にハ雪きおほくして雪つもり
て屋根をおほひ出入なり
がたしゆへに毎秋衣食た
き塩増までおさめたくハへ
はるをまつその中埋もれ
居る家ハかへつて暖なり畿
内にもゆきふりたる翌
日はあたゝかなるもの也
山海経に曰由首山小威
山空桑山ミな夏もまた
ゆきあり蜀の峨眉山にハ
夏秋雪ありその中に
雪蛆ありといへり
木朝富士の山ハつねにゆき
ふる六月の望に一日消て直ニ

その夜又ふり積誠に三国
無双の高山也唐人の中に
富士の山見たるを榮とす

ゆ四 湯浴する吉日

○正月八日治すれバ災をのがる同
十日の夜浴すれバ齒かたくなる也
○二月二日枸杞湯をあぶれバつや
ありて病をうけずとしよらす同六
日七日沐浴すれバ天より幸を得
八日暮合に浴すれバ身すこやか也
同上の丙の日に髪を洗へバ病を
いやす眼をわづらふ人ハ治る也
○三月三日枸杞湯を浴バ身うち
つや有て病なく年よらず同六日
暮方浴すれバ災をのがる同日
申の時頭をあらへバ奉公のありつき
有同七日申の時浴すれバ宝を得
同十七日浴すれバよきこと有
○四月八日暮方浴すれバ訴事なし
同七日浴れバ大にとミきたる同
八日枸杞湯をあミれバ病なく
年よらず九日ハ命長し

○五月朔日ひるごろゆあびれバ身
に光出る同日くこ湯をあびれバ
やまずとしよらずつやいづる

○六月一日ゆあびれバ病なく災
なし同六日湯あびれバ家業

をうしなふ此日忌べし同七日八日
二十一日ゆあびれバ病なく災なし
同二十七日食時にゆあびれバ身輕
すこやか也同日くこゆをあぶれバ
病なくとしよらずつやをいだす

○七月十一日くこゆをあぶれバ無
病にして長寿也そのうへつ
やを出す同廿二日ゆあひすれ
バしらが出来ず同日朝飯過浴
すれバ是かろくなるりつしうの
日ゆあびる事いむべし肌あ
らくなる

○八月三日かミあらへバよし
同七日湯あミすれバ聡明に
なる同日くこゆをあびれバ
無病にして寿をます同廿二
日日の出すにゆあミすれば

吉事ありて災をまぬかる

○九月九日浴すれバ無病長

寿也同晦日湯あミして十月

を清く待べし天より幸下吉事増

○十月一日浴よし同十四日くこゆを浴よし

○十一月十一日浴大にいむくこゆハよし同十五日

夜半迄浴バうれひおそるゝ事なし

○十二月一日浴よし同二日災をさる十三日

夜半に浴バ万事よきと有十五日

浴バ災をさる同廿三日かミあらひて

よし晦日くこゆをあびて無病長

寿にして顔色わか／＼しくつや出る

ゆ五 結納為替取日

吉日 曆中段【なる／さだん】

凶日 曆中段【あやふ／やぶる】

同下段【めつもん／ぢう日／ふく日】

ゆ六 夢を見て語らざる日

正【ひつじ さる／いぬ】 二【とり さる／ミ】

三【ひつじ むま／ゐ】 四【むま うし／うゐ】

五【むま うし／うゐ】 六【ね うし／ゐ】

七【ね うし／たつ】 八【とら たつ／ねゐ】

九【とら たつ／ねゐ】 十【たつ／ミ】

十一【さる ひつじ／いぬ】 十二【むま ひつじ／ゐ】

右の日の夢ハ善惡ともに語らず

謝辞

本翻刻をなすにあたり、篠田健一氏に数多御教示いただいた。

ここに記して感謝申しあげる。

註

伊藤孝行（二〇二四）翻刻『万代大雑書古今大成』（十四）、「メ

ディア・コミュニケーション研究」七七、一―十二頁

